



2009年、ボランティアも参加して葺き替えが行われた

古民家として残すことにしたとき、一番喜んだのは父の妹である叔母や姉たちだった。「かえって、この家を出た人たちが残してくれてありがとうと言っている。ああ、心のふるさとは、自分たちが住んでいた家が残ることによってつながっていくんだなと思いました」。

### 屋根の葺き替えにボランティアを募集

迷っている鈴木さんが葺き屋根を残す決心をしたのは、雨漏りがきつかけだった。「雨漏りがしはじめたら、止めようがないんです。雨の通り道ができて、茅が腐りだして、カビが生えてきます。それで、作り直すことにしたのです」。

葺き屋根は25年に1度の葺き替えが必要だ。しかし、費用が半端ではない。今回も総費用は1千万円近くにもなった。鈴木さんのお父さんがやったころはまだ地元職人がいたし、近所の人も手伝ってくれた。今回はそれができず、葺き職人を5人ほど京都から迎えることになった。材料も地元ではなく、京都から取り寄せた。それでも足りなくて、一部は九州の阿蘇からも調達している。

いい機会だから、都会の人たちに手仕事の素晴らしさを知ってもらいたいと、葺きのボランティアを募ることを考えた。集まってくるだろうかと心配したが、インターネットで呼びかけたり、新聞に取り上げてもらったりしたこともあり、30人ほどが集まった。ボランティアの年齢や性別は千差万別。なかには、古民家アトリエを持ちたいので参考にしたいと関西から来た人もいた。

作業はまず、古い茅を降ろすところから始まる。その作業だけで3日間。皆、煤で真っ黒になった。しかも、油だから落ちない。ボランティアの大学生が帰りの電車に乗ったら、周りの人が蜘蛛の子を散らすように逃げたという笑い話もある。印象に残っているのは少

しも休むことなく働き詰めだった小柄な女性。夢中になれる何かがあったのだろうか。

ところで、今回の葺き替えで終わりではない。あと20年くらい放っておいても大丈夫だと思っていながら、ちゃんと維持するのであれば、5年に1回、せめて10年に1回は手を加えないとダメだと言われた。「そんなに頻繁にやるのか!」。

鈴木さんの本業は建築士だ。だから、中を変えたいときは図面を引いておいて、大工の都合がいいときに直すということが出来る。祖父も宮大工、父も工務店の経営者という特殊な状況だったから維持できたのかもしれない。普通の人には無理だろう。こうして、多くの古民家が消えていった。いまや、自然のものを持つことのほうが贅沢になったのだ。

### 自分発見サロン「可喜庵」

そんな苦勞をして維持している古民家を、鈴木さんはどう活かそうとしているのだろうか。参考にしたのは、スターバックスが提唱するサードプレイスという考え方だ。ファーストプレイスは自宅、セカンドプレイスは職場、サードプレイスはその中間の役割を果たすというもの。それなら、ただ単にギャラリーとして貸すのではなく、話ができて、交流が始まるサロンにしたいと考えた。そして2006年、室内を大幅に改装し、アーティストの展示ギャラリー、ミュージシャンの演奏会場、手作り教室、トークショーなどのイベント



可喜庵では若手作家の展示会が開かれていた



作品を持ちこんだ作家と、展示会の予定を話し込む